



KURASHIKI CENTRAL HOSPITAL

K NEWS No.29 2016.10

Close-up

地域連携

—それぞれの視点から—

この冊子は、倉敷中央病院をご理解いただくとともに、皆さま方とのコミュニケーションをはかるためのものです。皆さまと当院を結ぶかけはしとなるように、「Kニュース」と名付けました。

倉敷中央病院 ■患者本位の医療・全人医療・高度先進医療■

地域連携

日本は世界に例を見ないスピードで少子高齢化が進んでいます。4人に1人が65歳以上の高齢者で、2025年にはいわゆる“団塊の世代”がすべて75歳以上になります。高齢者は病気になる割合が多く、高血圧や糖尿病などの生活習慣病のほか、脳卒中、心臓疾患、肺炎、骨折のため救急車で搬送され、入院することが急速に増えています。当院のような急性期病院では、今後もそうした患者さんを多く診療することが予想されます。

国は、持続可能な医療・介護サービスの提供体制を整備するため、急性期医療を担う病院と長期にわたり療養を担う病院の機能を分けようとしています。急性期の医療を必要とする患者さんを新たに受け入れて診療するため、病気が軽快すれば地域のかかりつけ医に、あるいは、早急に転院していただくことを推進しています。1医療機関が最初からずっと診療するのではなく、地域の複数の医療機関が協力し合って診療し、医療を受けながら住み慣れた場所で住み続けることができるようにする体制作りが進んでいます。

退院・転院すると一旦治療が途切れてしまうと不安に感じられる方もいらっしゃると思います。地域の医療機関や当院内の様々な職種のスタッフは、患者さんに切れ目ない医療を安心して受けていただけるよう、積極的に「連携」に取り組んでいます。

CONTENTS

地域連携とは 3

クローズアップ
地域連携 4
－それぞれの視点から－

トピックス 10
わが街健康プロジェクト。
－「心の病と地域移行支援」を
テーマに

インタビュー
消化器内科
部長 守本 洋一 12
C型肝炎のはなし

お知らせ 14
みんなのくらちゅう6完成

提案箱から 15
窓口での保険証確認について

16
小さなベビー服

17
倉敷市「花と緑の功労者」

消火技術訓練大会

QQ車 18
ミッキーマウス・ミニーマウス来院

倉敷南高校職場体験

るため、2014年に「倉敷ERnet」を立ち上げました。

——「倉敷ERnet」の取り組みを詳しく教えてください

田村 搬送をする消防署の救急救命士から急性期病院、回復期病院は役割分担をしています。それぞれの場面で、患者さんがどのような過程を経ているかを知る機会は少ないのが現状です。救命士は搬送後、急性期スタッフは転院後、回復期スタッフは転院前の患者さんの状態を知ることが目的に、倉敷ERnetでは一人の患者さんを取り上げ、携わった救命士や医師、看護師、リハビリスタッフらがそれぞれの過程を発表し、参加者皆で経過を振り返ります。

——変化したことはありますか

田村 急性期治療は経過の中の一部で、一旦状態が安定しても自宅退院や職場復帰には数々のハードルがあり、長期にわたるリハビリやMSWによる社会支援、調整の必要さが分かりました。同時に患者さんが懸命に歩行練習などのリハビリをされる姿を拝見したり、自宅退院へ必要な社会支援の実践を伺ったり、実際に患者さんの声を聞くことで、私たちは日々の急性期治療が患者さんの回復につながっていることを実感できる、非常に有意義な会となっています。

——地域全体で患者さんを診るという風土が醸成されるのですね。今後はどのような活動を目指されていますか

田村 実際に自宅退院した患者さんに話を聞くと、社会復帰に至るまで身体面だけでなく、心理的な問題、仕事などの社会生活・金銭面など多方面にわたる変化に苦慮されている方が多いです。そこで今年から自宅退院された後でも、何でも相談できる「よろず相談所」システムを院内各部署の協力を得て始めました。自宅に帰られた後の支援も当院だけでなく、他病院のご協力も得て地域全体で行っていければと考えています。

倉敷ERnetもよろず相談所も、患者さんの声を聞くことから始まりました。当院の救命救急センターは急性期という限られた期間しか回復過程に関わることはできませんが、最終的な患者さんの声を大事にして日々の業務を行いたいと思っています。

倉敷中央病院の救命救急センターでは2015年度、65,632人の患者さんを受け入れました。2013年の救命救急センター指定後、救急搬送数は増加傾向で、昨年度は9,474件ありました。重症患者さんの受け入れ増加に伴い、手術件数は669件、事故などで重篤な外傷を負った患者さんは254人でした。



救急科 副医長 田村 暢一郎

たむら・のぶいちろう

平成18年鹿児島大学医学部卒業、平成25年から倉敷中央病院。日本外科学会専門医、日本救急医学会専門医、日本集中治療医学会専門医。

——救命救急医療の現場では、どのような連携がありますか

田村 重篤な外傷を負った患者さんは、救命のための手術などを行う当院などの急性期病院に搬送され、集中治療を受けます。患者さんそれぞれの状態は異なり、医師、看護師だけでなくリハビリスタッフやソーシャルワーカーなど多職種によるチームで患者さんをサポートします。

多くの重症外傷患者さんは長期間のリハビリ期間が必要で、リハビリは主に転院先病院で行われます。そのため、病院間や職種を超えた医療者の連携は不可欠です。搬送から救命・回復まで、地域内での多職種間の連携をさらに推し進める機会を作

患者さんの声を大事にしなが
ら、医療者の連携を推進する

MSWの視点

られています。その役割を果たすため、病状が落ち着いた患者さんには転院をお願いしており、当院の現在の平均入院治療期間は11.8日です。自宅退院が難しく、引き続き入院治療を要する患者さんには、出来る限り患者さんの希望に沿った転院先をご紹介します。

「転院することによって治療が途切れるのでは」と心配される声を聞くこともあります。当院では、患者さんが転院後も切れ目ない医療を安心して受けていただくことができるように、普段から、周辺の医療機関や看護・介護・行政・障がい福祉の関係者と顔の見える関係作りも進め、積極的に「連携」に取り組んでいます。

——MSWの仕事の魅力を教えてください

MSWの多くは社会福祉士という国家資格を持っています。社会福祉士が大切にするのは人の“生活”です。病院という日常とは異なる場所での療養は、患者さんはもとより、周りのご家族にとっても大変なことです。療養を機に生活が大きく変わる方もおられます。病気や怪我と上手に付き合いながら生活するために、どんなサポートが必要か、利用できる社会資源はないかを患者さん、ご家族と一緒に考え、一時ではあるかもしれませんが、患者さんの人生に寄り添えることが最大の魅力だと思います。



——今後の展望・目標を教えてください

医療の現場に福祉の専門職であるMSWが多く配置されるようになってきました。病院は普段の生活から離れた場所に感じられるかもしれませんが、地域社会の一部です。医療技術の進歩に伴い、病気と付き合いながら生きていくことは、今後、もっと当たり前になると思われます。医療だけでは患者さんやご家族を支えることはできません。地域全体で病院同士の連携や医療と看護・介護・保健・福祉の連携が進み、生きやすい地域づくりに貢献したいと思っています。

「退院後の生活が不安」「医療保険や介護サービスなどについて知りたい」一。突然訪れる病気や怪我により、患者さんやご家族には、身体的・精神的・社会的・経済的に変化が起こることがあります。メディカルソーシャルワーカー（MSW）は、その変化によって生じる困りごとに、患者さんやご家族に寄り添い、社会福祉の立場から相談に応じます。他の医療機関や介護・行政等との連携することで問題解決できないか、利用できる社会資源がないかなどを患者さんと一緒に検討します。



患者さんの人生に寄り添い、
住み続けやすい
地域づくりの貢献を

——どのような相談がありますか

病院機能によって相談内容や傾向は異なります。当院のように急性期の病院では、退院に関する相談が最も多いです。退院の中には自宅退院と転院や施設入所があります。介護保険などを利用し、ケアマネジャーや保健師と連絡を取り合って安心して自宅へ帰られるように支援します。また、急な入院や長期的に療養が必要となる患者さんも多く、医療費に関する相談にも応じています。

——転院はなぜ必要なのですか

当院は緊急度が高く、手術・入院が必要な患者さんの対応が求め

事務の視点

がかかりつけ医に紹介状を作成しますので、治療が途切れる心配はありません。

地域医療連携室では、お近くの医療機関について詳しくない方、今まで病院にかかれたことの無い方に、通いやすい距離などで患者さんの身近な医療機関をご紹介します。



——地域連携パスについて教えてください

当院での急性期の治療が終わり、回復期の病院を経て早期に自宅へ帰れるよう、それぞれの医療機関の先生同士をつなぐのが地域連携パスです。患者さん自身、ご家族は治療期間の目安や、どの医療機関でどのような治療を受けるのか、流れが把握できるようになります。



当院の医師、地域の病院・診療所の先生が患者さんの情報を記入して情報を共有していきます。異常があれば連携をとって素早く対応できるというメリットもありますので、受診をされる際は持参をお願いします。

——「わが街健康プロジェクト。」という講演会を開催されていますね

超高齢化多死社会の到来による救急患者の増加、必要な患者さんへ適切な医療の提供ができなくなる事態を見据え、医療の機能分化に対する市民のみなさんの知識を高め、共に考えていきたいと願い、2013年に立ち上げました。内容につきましては、本紙10-11ページに紹介していますので、ご一読ください。

これら地域完結型医療に関する取り組みは、「みんなのくらしゅう」という冊子でもご紹介しています。このたび最新号を発行しましたので（詳細は本紙14ページで紹介）、ご興味のある方はぜひ手に取ってください。

医療機関が役割分担した場合、病院・診療所との得意分野を繋ぐ「連携」がとても大切になります。当院の地域医療連携室では、医療機関からの紹介状を持った患者さんの予約調整や、かかりつけ医のご紹介、地域連携パスや地域完結型医療を市民に広める活動などの運営を行い、地域全体で患者さんを診る環境整備の一助となれるよう、業務を行っています。



——かかりつけ医を持つことの必要性は

高齢化に伴い、複数の慢性疾患を併せ持つ患者さんが増加しており、その対応が課題となっています。1人の患者さんが受ける医療を継続的に、かつ総合的に管理するかかりつけ医を持つことは、日々の全身状態や健康状態の管理につながります。慢性的な病気も継続した診察が可能で、専門的な治療や検査、入院が必要などときには、適切なタイミングで専門の病院へ紹介してくれます。専門的な治療が終わった際は、担当医



医療・介護資源と患者さんを結び、
切れ目のない
医療連携を目指して



小柴先生、赤澤先生、平岡先生

有本先生



わが街健康プロジェクト。

「心の病と地域移行支援」をテーマに

「医療機関と上手に付き合う」「病気の予防と健康維持」をテーマに開催している「わが街健康プロジェクト」(わがプロ)の第12回講演会が8月30日、倉敷市民会館で開かれ、倉敷市を中心に200人の市民が参加されました。「心の病と地域移行支援」をテーマに、あずま会倉敷病院 看護部長 有本 妥美先生が「精神を病むことと生きること」「病の経験」の理解への手がかり、「真備地域生活支援センター」 赤澤 慶先生、つどいの杜まりも 小柴 雅史先生、あずま会倉敷病院 地域医療連携室 平岡 憲一先生が「地域移行支援、病院から地域へ」「精神科で入院している人の思い、生活のしづらさから」と題して講演しました。

有本先生は講演で、「精神病床における患者さんの平均在日数は300日を切っており、一度入院したら長く退院できないというイメージは変えてほしい」と呼びかけ、「どうすればその人の生きにくさを軽減できるのかに関心を持っていただければ」と述べられました。

赤澤先生、小柴先生、平岡先生

はトークセッションの形で講演。福祉サービス等の支援が充実しており、生活の場を地域に移せる患者さんが増えていると報告。「退院前から医療と福祉が連携すること、より多くの方に『退院する』選択肢を提示していきたい」と締めくくられました。

講演の詳細は、公式ホームページで確認することができず。こちらのQRコードを読み込めば、直接ページへつながりますので、ぜひご覧になってください。

わがプロカウンター

参加延べ人数	2,282人
ブロンズサポーター (講演会3回参加)	204人
ゴールドサポーター (講演会6回+ミーティング2回参加)	67人

第13回講演会は

学生との共同企画

川崎医療福祉大学・医療福祉マネジメント学部4年生・古武彩花さんは「主婦を中心とした多くの女性が、健康診断や婦人科検診を受診し、問題があれば早めの治療を施すことで、家族が安心して過ごせる社会を目指したい」を卒業研究のテーマとしています。次回第13回の講演会はわがプロと古武さんの共同企画として、健康診断と婦人科検診の講演を予定しています。

健康診断の大切さを伝えられるよう精一杯頑張ります！



わが街健康プロジェクト。

次回第13回講演会は
2016年11月29日(火) 14:00~
倉敷市民会館 大会議室2F

参加無料

講演①

「受けていますか？年に一回
カラダのメンテナンス“けんしん”」

倉敷市保健所 健康増進センター 所長 檜垣 みちよ 先生

講演②

「もっと知ろう、乳がんについて」

川崎医科大学附属病院 乳腺甲状腺外科 医長 野村 長久 先生

血糖値測定や各種相談コーナーを設けた「健やかブース」に、第13回限定で乳房セルフチェックと育児相談を行います。また、3歳〜5歳までの未就学児を対象とした臨時託児所も設けます。定員は先着15人で事前のご予約が必要です。当院や共催病院、公民館などに配置しているチラシが申し込み用紙となっております。問い合わせはわがプロ事務局(倉敷中央病院地域医療連携室 TEL 086-422-15218)までご連絡ください。

第14回講演会は平成29年2月17日(金)の開催を予定しています。詳細は来年1月に発行するKNEWS 30号でお伝えします。

C型肝炎のはなし

消化器内科

部長 守本 洋一

C型肝炎はどのような
症状が出ますか？

守本 肝臓は体に必要な栄養分の生成や貯蔵、不要となった老廃物や薬物の解毒など、生きていく上で必要不可欠な機能を担っています。C型肝炎はC型肝炎ウイルス（HCV）の感染によって起こる病気です。感染したときに、倦怠感や食欲不振といった症状が現れることもあります。ですが、自覚症状のない人もいます。



治療方法は？

守本 これまではインターフェロンという薬の注射が中心でした。ただ、発熱や倦怠感、血小板減少など強い副作用があり、高齢者には治療ができませんでした。また、副作用に耐えて治療したのに治らない人もいました。ところが、2014年の秋に一大転機がありました。飲み薬だけで治療する方法が登場し、薬に多くの患者さんが治る時代になったのです。

新しい治療方法を
詳しく教えてください

守本 新しい飲み薬のDAA（直接作用型抗ウイルス剤）は、HCVをピンポイントで攻撃することができます。

い人もいます。C型肝炎が慢性化すると、10〜30年後に肝硬変や肝臓がんなど重い病気になる恐れがあります。

どのようにして
感染しますか？

守本 血液を介して感染します。空気感染や経口感染はありません。1990年頃までは輸血など医療行為が問題でしたが、その後は、入れ墨、ピアスの穴を開けるといった行為による感染が問題になっています。

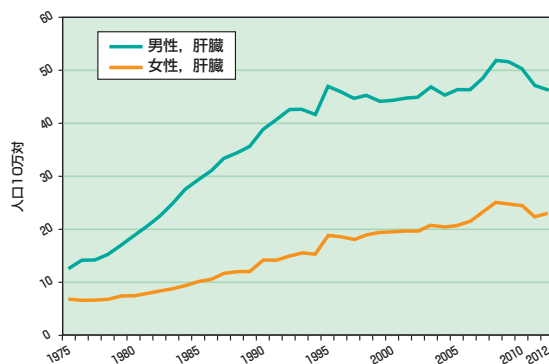
診断はどのように
行いますか？

守本 血液検査でHCV抗体の有無を調べます。陽性の場合は現在感染しているか、過去に感染して

それまでのインターフェロン治療とは異なり、副作用が大幅に減り、高齢者も治療が可能になりました。導入時の入院も、DAAでは不要になりました。服用期間は処方する薬の種類で異なりますが、短くて12週間、長くても24週間です。治療中に貧血や肝機能異常などの副作用が出ることもあるので、2週間に1度は外来通院としていきます。ウイルスが体内から排除され、血液検査の結果が正常になることをSVR（ウイルス学的治癒）といいます。80〜90%以上の患者さんが治癒しています。

早期治療で将来の肝硬変や肝がんなどを予防する目的で公的補助も充実しています。肝炎医療費助成制度などを利用すれば、月々の自己負担限度額は通常1万円、最

治った方か、です。陽性の方は、さらにHCV遺伝子などを詳しく調べます。



肝臓がん 罹患率（全国推計値）年次推移
資料：国立がん研究センター がん対策情報センター

大2万円ほどです。

早期発見のためには？

守本 冒頭でもお話ししましたが、早期の医療機関受診が重要です。HCVに感染しているのに認識していない人は全国にまだ100万人以上と言われています。C型肝炎は高齢の方ほどかかっている人の多い病気です。肝炎ウイルス検査は行政主導でも行われていますので、近くの保健所等に尋ねてください。当院でも手術前検査で感染の検査をしており、患者さんの同意をいただいで、結果をダイレクトメールで伝えています。

提案箱



「Kニュース」は、皆さまと当院のコミュニケーションの場です。お気軽にご意見をお寄せいただいて、皆さまとともによりよい病院にしていきたいと願っています。

保険証確認で窓口へ保険証を提示したところ、返却をするとき性別の違う女性の保険証を確認もせず渡され不快に思った。保険証は身分証明にもなる大切なもののなのに、それを確認せず渡す職員は教育が足りていないのではないと思う。もし、自分が悪用したら病院はどう責任を取るのかと思う。事務的にこなすのではなく、最悪の場合を想定して教育して欲しい。

このたびは不愉快な思いとご迷惑をおかけしたことを、お詫びいたします。ご指摘の通り「保険証」は身分証明になる大切なものであるという意識の欠如した行動で弁明の余地もございません。今回の事故について部署にてミーティングを行い、保険証の大切さや返却間違いによる影響について話し合いました。その上で、保険証の返却手順「患者さんご本人と一緒に名前・生年月日を確認し返却する」という基本手順を再確認致しました。今後は全員が励行できるよう指導してまいります。このたびは、貴重なご意見をいただき、たいへんありがとうございます。

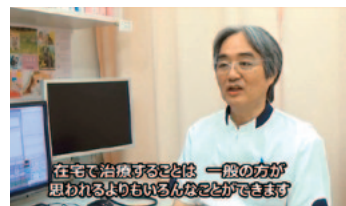


「みんなのくらちゅう6」が完成しました！

地域医療連携の仕組みから当院の取り組みまで、一冊まるごと連携をテーマにした冊子「みんなのくらちゅう6」が完成しました。外来待合、病棟で無料配布しています。ぜひ持ち帰っていただき、ご家族や友人とご覧ください。

今回は「在宅医療」にスポットを当て、最期の時間を家で過ごしたいという患者さんの気持ちに寄り添い、残された大切な時間をどう過ごすか考えてもらえるように作り上げました。

初の試みとして、冊子のQRコードから一步踏み込んだ動画を視聴できます。家で過ごすことでしか得られない時間の大切さを伝える「在宅医療」編、総社市まちづくりの



みんなのくら動画「在宅医療」編の一コマ

一環で制作された適正受診動画「かぜってなあに？」、かかりつけ薬局の必要性を訴える「薬局」編の3本です。

2011年に「連携」をテーマにして第一弾を発行し、地域住民の方々が理解しにくい病院の機能分化や、当院での役割について発信してきました。みんなのくらちゅうを読んで、かかりつけ医を持ちたい、連携バスが使えるか知りたいなど地域連携に関心を持たれる方が増えています。今回は第6弾となり、さらに進化を続けています。ご意見、ご感想などございましたら、地域医療連携室の窓口（1-8

総合相談・地域医療センター
外来中央玄関
すぐ横）までぜひお寄せください。





倉敷市の「花と緑の功労者」に 当院が選出されました

倉敷市内の緑化に貢献した団体・個人を表彰する「花と緑の功労者」で、当院が団体の部で選出されました。1923年の創立当初から院内に設けている温室や、季節の花々や芝生とともに倉敷の町並みを一望できる屋上庭園など、院内各所で患者さんらが緑に親しめる環境を整備していることなどが評価されました。

当院建築課の原田裕二さんは「『病院くさくさない明るい病院』という創立時の設計理念を大切にしています。受賞は大変うれしく、誇りに思います。今後もグリーンセラピー効果を実感いただけるよう努力します」と意気込みを新たにしました。



訓練の成果実る！男子の部 倉中優勝!!

— 消火技術訓練大会

第28回消火技術訓練大会が9月30日に開かれ、消火器男子チームとしては初の優勝を飾りました。この大会は倉敷市防火協会に加入する27事業所の計29チームが出場し、2人一組のチームで消火器の基本的な操作や初期消火の技術を競いました。

会場の消防グラウンドや、当院ヘリポートでも練習を重ねて栄冠に繋がった二人は「一心同体で頑張り、多くの人のおかげで優勝を掴むことができました。まさに部活をしていた時の青春時代のような気分を思い出しました」と振り返りました。女子の部では関連施設である倉敷リバーサイド病院が優勝しました。



ありがとう...

優しい気持ちが一针一针に 込められたベビー服



8月下旬、当院ボランティア室に着丈20センチほどの小さいなベビー服が届きました。送り主は松本海璃君という、当院への受診経験もない愛媛県の小学5年生でした。

当院のボランティア「グリーンはあと」の活動のひとつ、手芸サークルでは、産ま

れてすぐ亡くなった赤ちゃんを包みこむためのエンゼルブティック（小さいベビー服、スタイ、ぬいぐるみ）を制作して、ご家族に届けています。

この活動を紹介した書籍「ちいさなちいさなベビー服」と出会い、感銘を受けた松本君は、自身で制作したいとの手紙を届けてくれました。ボランティア室から縫い方見本と型紙をお届けて約1ヶ月、お手紙とともに可愛らしいベビー服が届きました。当院にも来院し、ベビー服の著者 八束澄子さんや手芸サークルのメンバー、当院のスタッフに作製の思いを話していました。

誕生後しばらくの間、NICUに入っていたという松本君。産まれてすぐ消えていく小さな命に自

身を重ね、心を寄せてくれた優しい少年です。「本当は使われないほうが良い」と願いながら、習いたての裁縫で一針一針、縫い上げてきました。優しい気持ちに感謝し、大切にさせていただきます。



夏休みの終わりに来院した松本君（右から2人目）

※当院のホームページには、お手紙内容も公開しています。こちらのQRコードを読み込めば、直接ページへつながりますので、ぜひご覧になってください。



松本君からの



QQ車は、皆さまに倉敷中央病院のできごと
を運ぶ(お伝えする)コーナーです。

倉敷南高校職場体験

倉敷南高等学校の生徒15人が8月9日・10日の2日間、当院で職場体験を行いました。病棟で看護師に帯同し、医療・看護の現場を経験したほか、BLS研修ではAEDの使用方法や一次救命の手順等を学びました。



生徒は体験後、「常に先回りの行動で、患者さんからの要望がなくても自分から聞いて見て感じて判断する必要があると感じた。また、高度なコミュニケーション能力が必要だと、再確認しました」「生の医療現場を肌で感じる事ができた。普段では携われない患者さんと触れ合うことができ、より看護職への志望が強くなりました」などと振り返っていました。



聞かせてください

ご意見 ご要望

■本誌に関しましてご感想・ご要望等ございましたら、当院広報室までご連絡ください。

電話：086-422-0210 (代表)
Email：koho@kchnet.or.jp

子どもたちに逢いに、 夢と魔法の国からお友達がやってきた！

ー東京ディズニーリゾート・アンバサダー、
ミッキーマウス・ミニーマウス来院

入院中の子どもたちにディズニーの楽しい夢を一。7月22日、当院小児科病棟の会場に、ミッキーマウスとミニーマウスがやってきました。

東京ディズニーリゾートは、病気療養などの事情で来訪が困難な方々にディズニーの楽しい夢を届けたいと、社会福祉施設・医療施設の訪問活動をされており、その一環で当院への来院が実現しました。

子どもたちが「ミッキー、ミニー」と呼ぶと、ミッキーマウス・マーチにのって二人が登場。「イツ・ア・スモールワールド」に乗って可愛いダンスを披露する姿を間近で見る子どもたちの目は釘付けとなり、気分はパレード鑑賞！。ミッキーとミニーは「ユー・キャン・フライ」をBGMに、子どもたち一人ひとりに歩み寄って、握手や鼻キス、ハグ、記念撮影と、大サービス。ファンカードを手渡し、会場の全員とお友達になりました。

ミッキーとミニーは、会場に来られなかった子どもたちのために病棟を訪問、一人ずつとお友達になりました。参加した子どもたちは「初めて近くで見たけど、とってもかわかった」「ミッキー、ミニーとお友達になれてうれしい」と大喜びでした。

倉敷中央病院の役割は？

当院は地域の診療所や病院から紹介のあった緊急・重症な患者さん、救急搬送された患者さんを中心に、入院や手術など高度で専門的な医療を24時間体制で提供する急性期病院です。症状が安定されましたら、お近くの医院をご紹介させていただきます。紹介元の先生よりご依頼があれば、いつでもフォローいたします。

倉敷中央病院



地域医療機関・
救急を支える病院

かかりつけ医



専門的な検査や治療
が必要なときは
倉敷中央病院へ



病状が安定したら
かかりつけ医へ

かかりつけ医を持ちましょう

かかりつけ医を持つことは患者さんにとって大きな利点があります。かかりつけ医は当院の医師と違う視点で病気を管理することができ、十分な時間を取っての相談も可能です。入院や手術など高度で専門的な医療が必要と判断された場合、紹介状を作成されますので当院を受診してください。当院での検査や治療が終了しましたら、当院主治医からかかりつけ医に治療結果を報告しますので、かかりつけ医で継続した治療を受けていただきます。



公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構

倉敷中央病院

〒710-8602 岡山県倉敷市美和1丁目1番1号
TEL.(086)422-0210代 FAX.(086)421-3424
<http://www.kchnet.or.jp>